



復興と仙台七夕

東日本大震災後も途絶えることなく開催された仙台七夕。今年も復興に向けての仙台の希望が、街を鮮やかに飾ると思います。実は仙台七夕の歴史は、「復興」と密接に関連してきたことを知ることができます。

昭和二十一年（一九四六）年、前年の空襲で大きな被害を受けた仙台の人々は、戦災からの復興を願ひ、五十本余りの七夕飾りを街に飾りつけました。翌年にはその数は五千本にも増え、仙台の「復興」を印象付けたのです。そして、さらに遡ると、戦前の仙台七夕まつりもやはり「復興」と関係があったのです。

仙台の七夕は、明治時代には既に全国的に有名になっていましたが、大正時代に入ると景気悪化も影響して、かつての豪華さを失ってしまいました。そんな中、大正十五（一九二六）年八月六、七日、不景気から脱出し、商店街の「復興」を図ろうと市内の商店街で大売出しが行われた際、大町五丁目の商店街が懸賞つきで七夕飾りのコンクールを行ったのです。企画は大成功となり、翌年コンクールは拡大し、昭和三（一九二八）年からは商工会議所も加わって、七夕は一躍、全国的な仙台最大のイベントに発展したのです。

大町五丁目のリーダー

このように七夕が仙台最大のイベントに発展した背景には、佐々木重兵衛・三原庄太ら

を中心とした大町五丁目商店街の若手経営者の力がありました。従来は個々の商店の飾りだった七夕が、若い実業家の新鮮な感覚によって、地域イベントへ大きく変貌したのです。

このうち佐々木重兵衛は大町五丁目味噌・醤油を製造販売した佐々木重商店の七代目当主でした。佐々木が味噌・醤油を扱う大店に発展したのは四代目の時で、以後、歴代当主の努力で、佐々木は仙台を代表する味噌・醤油の大店となり、またその活動は家業にとどまらず、市政や経済界にも広がり、仙台の実業界のリーダーとして重きをなしたのです。

地域のリーダーへ

四代目佐々木重兵衛は、文政六（一八一三）年に八幡町の造り酒屋・天江家に生まれ、大町のたが職人佐々木十兵衛（三代目）の養子となりました。養父が早くに没したために困窮した佐々木家を盛り返すために江戸で一旗あげようと家を飛び出した重兵衛でしたが、あえなく失敗。国許に戻った重兵衛は、親類中から厳しい非難にさらされますが、才を認めていた養母は、彼を暖かく迎えたそうです。養母の恩義に一念発起した四代目重兵衛は、僅かな資金を元手に麻の仲買いを始め、農家に手付金を渡して麻を買い付け、城下の問屋にそれを売ることを繰り返して、少しずつ財をためると、質業にも進出しました。

こうして佐々木屋の立て直しに成功した四代目重兵衛が次に取り組んだのが、味噌と醬

油の製造、販売でした。養母が味噌・醤油業進出を遺言したことから、製造と販売に着手した重兵衛は、出来あがった製品を自ら売って歩き、薄利で価格を低くしたこともあって、評判が高まり、あつという間に佐々木屋は仙台北城下有数の味噌醤油屋へと発展したのです。明治維新の大変革を経ても佐々木屋の発展は衰えず、仙台屈指の豪商となっただけでなく、周囲の人望を集めた重兵衛は、市会議員、仙台商業会議所議員にも選任されています。

有数の大店となった後も、重兵衛は奉公人が寝ているうちから起き出し、自らは質素儉約を実践しながらも、困窮している人への助力や公共への寄付を惜しみませんでした。また、名取郡生田村（現、仙台市太白区）の養蚕事業などに資金を提供し、同村が「日本三大模範村」と評されるに至る基盤作りに大きな役割を果たしてもいます。

明治二十八（一九九五）年に重兵衛は七三歳で没しますが、その逝去を伝えた新聞は、どれも「慈善家」としての側面を称賛することを忘れませんでした。



戦前の佐々木の店先。大町通りと東二番丁の北西角にあったが、仙台空襲で焼失した。

※肖像写真は「宮城県実業家奮闘史」（天正4年より転載）

仙台市史

好評発売中 特別編4 市民生活

明治以降の人々の暮らしを、豊富なカラー図版とともに紹介

◆B5判 620頁 オールカラー ◆定価6000円(本体5714円)



戦前もたくさんの人出で賑わった仙台七夕（昭和11年 東一番丁）

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館／株式会社教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183  
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074